

花乃下巻

8/6-2 (3)

俳諧資料カード

年代 文化百子
13

編者
(筆者) 三浦

書名 花乃下巻

備考

(下垣内蔵)

下垣内和人
737



た四可由名ハ大重蘇庵小佛と號
寸通祐恒助老て七た半門と改む
出き家翁の遺念なれとなり若し
ア一時家多しくて生業小力誠者
雙素をちり才をとくの一家をお
さめて歎篤いの名を稱さるは其
以類此る井塘雨急と法團強歴
て日向に渡り高子穂山北昔を言

以穩々系の神威を伝きて此傳々
崎の里に笈をおきく久しく在
きくまゝに睦い統社を學ひしと
き前塘雨海省安りて娘女きりれ
洛東岡崎みすえさふ五升菴燦爰
老師の門み入て正風の教をうち
功環細やう成しとくや春過秋
と此くまゝたる井ぬしと老何し

爰見果あふてより二世瓦全詞宗
に雌黄を乞て和文を學以長歌
綴りて撰集みも聯をきり道み信
ある餘り芭蕉翁の三筆の文を
託して世み仏め蕉門此傳を歌し
ぬやう老て京城長子に譲りお
み適きて月をきり竊に卷巻の
業を考一系川るを化み傳くて

地生業の一助ともせりかしとい
さるるまじき名を

公呼しりて郷丹業を植る地を
許しなるよりよてお野を業樹庵と
呼しりし七角と号し三男業夢丹
卷盤の古景を画せ長押丹掬ぬも
とより悟及丹も跡から候して法
義強を一事一石丹書して祖先

九族之間友徳男丹靈の善徳と
して土中丹納め下此石を建ふと
て遠く信志に告こして丹に碑銘
を記させ経塚として側に塚を植て
うらし植し花の下唐丹世孫人と
唱て後の世誠教しりて生かると
あいの候丹書し候しや信志丹され
え志るしらぬ人丹にけ翁の齡長

かきと頼一に天手限ありて文化
乙亥年正月七日六午有回中て頼一
浄土の衆とぬりぬ誰う惜す
人悲す
人や子弟一族志を
法いて念以み作吾を務後世めと
中一火残思て後七大得志の途
後に遺竹を第一将末地の人との
手向奉あるを母に傳ふ

寸此凡父子の句をいふと
梓一冊子として巻魂をたぐさめ
孝考み伝むにさほさとのよ
しを詳しきみ叙をよと笑一残せる
に沈濁此糸しるす極中の海土を
茶々に葉の芦此茶を嚙て梅茶を
あつめぬ

字畫春兩

字畫春兩目
凄貫御漏
承盃一
計奇濕
毫透以新
然不燭
摺壓
頻在竹筒吹

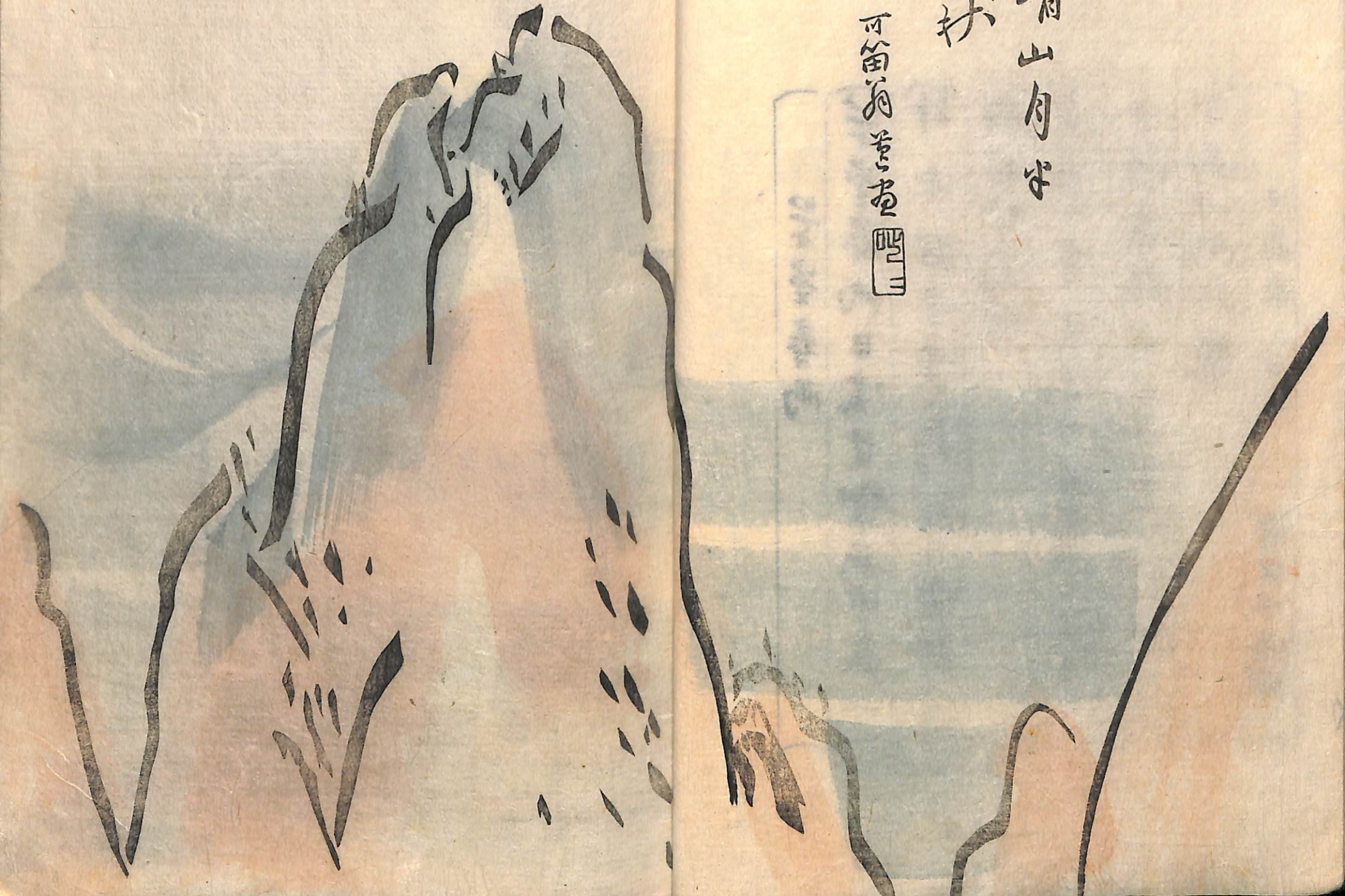
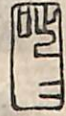
玄鳥之年
生篆思
當丹泥
嗑盞日
追隨春餘
芳州
幸泗堤
布
望西山
兩行
疎

右之秋
篆小佛詩

兼詳錄


峨嵋山月半
輪狀

可箇海善書



横原小景

藤野官



山

山

山



三結草小佛号と吟

身程や午部居のうーと膝と打

すき初やすきをかけす馬と 引

もくとせのきを髪めせとてお祈り

水風ろにまくとせお祈りお祈り 月

火とありてお祈りお祈りお祈り 念

きく奥の迷い子もありお祈り 月

ふうわりと心蓋にかるや 念 撲

平家むすやふふに陸と
ひる中の鶏やへりもこの花
たる雨やたしく板木のうつせ貝
争啼て鈴からとけるあう肌
顔接てよそほふ描やまこころ
たる風や市女う顔のちくら色
逢さくら竹の小えしとあうりりり
鶯のきき松や日と茶にりり

ひこを一の蓮おす細

引

妻あると此におくれて

子と語る古切雀 日の 花き

を雨まや竹のきき音の波に うく

絡まふ門の柳やころも うへ

二尺不とと影と巻あるとせ浅 地

空陽をの咲や干かきり 濡りけり

一八や名にも似合ぬ濃く紫

古茶と云も急須のうすき名ていふし
子子やりくまでかゝる 水の 急
みーろ 秋や灯と窗の二光り
村兩や 暁のかゝる 牛の 腹
すーろの 柳立こむ 戸口 外
おと、きには 虫さくさく 急の 山
不ら貝の 吹おーりり 急の 峰
いもの 葉のかむり ぶりりり 急の 扶

戸の 水ハ 急亦に 来りり 急の 秋
すむーに す 凡 落る 秋 原の 風
むー 急 中 ちいさき 急 舞に 急 心よる
いさまーろ 急 中 ちいさき 急 舞に 急 心よる
野 光にとれも けろり 角力 中
急 中 ちいさき 急 舞に 急 心よる
急 中 ちいさき 急 舞に 急 心よる
急 中 ちいさき 急 舞に 急 心よる
急 中 ちいさき 急 舞に 急 心よる

月すみて庭に影をあむ
水底の秋も又よくや鮎の暖
稲妻やハキハキ垣くくりぬけ
かりそて、今ハ月すむ田毎
夕く小やあーまをあゆむ野の影
木と共に引る秋の北加子
我常とありそぬおくハキサ海
冬ちりし海ちりす水の気

葉の葉のやつく冬の垣 根々
馬の尾にひつかけりや枯 茨
冬木立身を丸くせし影の影
石投てといはけりり冬の川
鶺鴒のうごきかき 狸 汁
うつゝ火やとめくをぬ夜の気あき
井のほとけ七日氷らす小徳りぬ
うさぎおや子のきりみり

さうと枯のうり蓮の茎
日むりくすとのとハきぬ冬の松
冬かきと此を居てとる氣をこきと送り
ちかき活し若さく子をこしヤし
ふくと汁を毒く煮る おく

五十年のゆめと除ねの嵐に吹拂いて家の業ハ
大節次節にうちまうせうし海をく扱着引かつ
志はらく世外の意をほとるに内外ふんの舞え

よく受けハ禮者の急や々秋の春

二葉の中に嘯るまうにぬき且して苔のふきつら
踏ふそ江一の坂二の坂こえて白き雪の横咲
とる梢のりし山の家すまじりあるハ瀑布
めと祿めこまうと且ふ木の下を宿として腰

ひらきたるハ入言のすしよまて 弥勒のまるとま
とのにや

藤とあて坐禅するのう 墓

二日月いさるるおちら三日四日の月のまゝくくいま
にうくして甲斐あきと此から又の秋をまつに落
霞ひ雨を不ちつーり丸くと又そ影をま
くく小一てあり時の影のいと細うけりハそくおき
とせにおちありける

お川嵐狂風のきつ髪目の目にかくる

をみえて福ふと此の世の中の人をころのむある
このから輝の木のなる光にを火をあけて柳
に踏鞠ふくみやすきに不しるいとちくらからに
きおうを一一空のうーきとまくとくうちほう大
玉のやととあはるそあをふありき

又るまじもやうて烟よをともみち

山鳥の尾のむきねすかり啼虫の木のうらまき

ふる群の色は、いりまますうをとおとあふ
人としておひいきくおくまのたのま、とまを
いとくちぎしき

ねまきや衽のたも気の俯す

きりし柿のやと日数経て甘くふるハあさりも君

子の教化みひとし柿の水若うりしころより能

諧は月日を送るるよしあれも生能の法に

口ふりてきましくおく皺さよせり

法柿や鳥もくもす秋をふる

月にハちやうにんえん柿とも時きり時来る速うさ

このころや木賊をけの凡のき

そ歌をつりて様を述

若の根の 春まをわふる

蜂の物の

田そまきる

むしりのこき

いとくまを

いり柿に

むしりあふぬ

すり衣

深みたる

小筵 二子

先なる陸の

音すみて

心ほそくと

こーかくを

おのゝたの

ひまもかく

かり陸のあめ

とちーて

もくちくちる

をるのを

娘のそびき

算ふるを

よれちすふい

老の波

まや入さの

山のたに

あるうささの

月の影

窓にこぼる

厂り祢の

かりのたぎに

水くき此

あたたに今い

うつせみの

世ハ世のまはす

き 色 山

烟とせて

かふるすも

おくれ先と

くものちー

岩あきりや

まのあさり

律のそー

うけひろき

蓮の巻は

いづらんと

ねふねいを

方にまめて

かこまぢい

作き つい

夜はくまて

よりりおく

東のつとめ

まゝまよて

そこまよて

かきあつめぬる

五月七日の曉についにまうふくおき

あふそりあし

まりぬふ曉 つくる雲の 禱 足馬

ねとすらあまからをすむりて

うちうくす蒲團のうち 氷柱い 慈温女

日毎に香花をそふて

雲やけのまをうち念す塚の 茶 松洲

雲をたや子のまみつく前うーわと

喟ーあひーハ余り幼き母におくれて

見とともに父のふところの中にひと

ありーるまを思ひわけて

雪佛に雪氷るわとまみつき 可統

母を親山におきわさかくして

氷柱とまあはつきあんころおした

七日くとうつりゆくに

かおーさは目にとまりて年えり

ちくとおくもいれもふるも根もすうら

ちぬ女

学の子よ種をよめ うれもよむ

此女

兄の可憐不幸にして刃まうの心だ

力あくと老母をいさえて

根くりによみを見せぬ心か

愚悲

今更に何カ学 音 ひ 祢る

きぬ女

一葉の種ひさもの胸にひきり

尚故

旨そへや刃にふりやる根のき

勢二

塚にきりきよせてま向うふ

尾上女

小戸川の氷氷りり 小根あしし

ちり女

先考すきぬいしのち浪を津にのりて

住居せーにはまよりたふり老

はる母をふくきのつらてお金のね

根をいさえり助けすぬせしにたから

すも弟可憐病にかりて人に先さち

一ものかちー ちやらんてあく

きえ入るるにほきふあぬき母に

かくして香をまよ向て

枯のころ枝狩つら—雪みそ水 豊女

女若しつひに枯りうと顔の露 五明

念佛の外ハ氷らぬおとあ— 猶菊

杖と折氷笠と氷て塚に雪みつき 齧牙

牙と氷る思ひや雪をこの月の入 路半

一目く—つ氷る雪の塚とふる 明之

雪空や雪晴くしおくちとり 梅路

お毎に面影のそふさむきうぬ 蔓見

雪空くく雪の風を念佛 杖力

雪空くく雪の向のくきや水屋 甚白

月すら水ぬ風影の露や冬こもり ふら女

経塚に雪あつたりて女子 峰女

水仙や水ま向てしお節らす ぬみ女

その雪のかあ—き根半の子雪 芳竹

さくりよるまにこたへり塚の盲人花水

款く水てく過尋ぬ一人もふ一竹之

何れりも思ふにさむき我身らか可水

ふたらややねハそのす時るにて兩律

尚ことも雨よ涙よ冬こしり圭史

今更に向あてもあ一水仙を妻女

合掌一ぬるや涙の玉あ水吟水

よむ人ハきえてあを水よまの梅棹月

雪結てさすうにささる佛 32 連山

八月とツヤ月にさむまのま 33 習之

を一まま人のままりまさま 34 厚薄

かあ一ままをまるまのままま 35 有志

功の積りてまままのまとまけま 36 正葩

冬之内併のまヤまれまをま 37 利涉

積徳の消るませまふま一ま 38 佛 金馬

冬の内入り一ま本のまのま姿ま 39 一州

塚のねきくやと此と乘に けり 凡古

塚に來て今も啼こ小萩よ 社鳥

枯蓮や水の方ととこきり 遊鳴

けり色ハ後には送らん 山鳥

西に入る萩やつるき 冬月 斗雪

亡人の交りかして冬 龍 兔白

十分に咲て枯けり 秋ふるら 鯉角

塚に咲と此とありり 冬月 枯 可律

こもりおく入る月影や枯屋を 清舟

入るいたな名のくのこりてさきの菊 清風

かきりあうとをーや嵐の原の 一柳

たそふや木叩しハ萩あすこー 野閣

枯蓮ー一本をハさきのまゝ 和暢

ゆえとのこ四ふにつけてさきの人 吟籠

枯あーの中にすてさう月と舟 我咲

唱名のこましくもりてさきさ 遊

嵐木がしし才をくく日と夜にりり 豊前 北岳

ましと一可面のぬしの流りぬき

ゆきりぬき

ちるとやハ柳をよ秋まひ 仿后 桃甫

入る月の跡方おきよあめ 風 羅凡

可留之人の法師の宗四し家

すまてこれ凡探のちを厚くりに

とよひをき人のねとありぬは

月ハ西に陸にうつむくうささく 大坂 尺艾

何をえて晴や枯野の夕 鳥 ハ千

はとーやとひ強ーくるる多 吾 菘

今ハ世にありとや日おるる 南他 旭子

おそ人にねる妻やこき 不と け 花 怡多

うつと火にうきもささるし念保 大坂 露宝女

目に向ふ同に若らき 不と け 大坂 露宝

城上家の可留の女と同の旧跡まで

目まのよきかとう人ありしよをひハ

ふてちあかりにてふしういせつハつきり

とみうふいあらんほをいとをふん

のとか秘てこのみーく先まーしをせ

ーけい

白雪に友うーあふてふく子うる

浴

瓦全

目まのよきかとう人ありしよをひハ

ぬ鏡の石碑を建て小祥の追

福とてあむ

可留居士

うーうまーをの下の落びを舞む

石の光りも切米の 中

豆馬

ふ等字さえつるものこましくい

五忍

了引おす あせのろそりる

和冊

戸障子をたつさは産き月の宿

可流

笈の水のおとのひや、

尚衣

徳すたのともくみーくくきみふれ 勢二

雲はく系の松鶴はをてる ことよ女

むーろ帆の破をつる ねくもり 意温女

世ハさきふあさふり天園 心 中女

暁のく川交に隣をのそく 心 吟女

漆上りくくるきぬの小色 五明

月 降め上より 月のさー冬り 由菊

うおきめぬける心筋そきしき 鼠牙

用のおきけも名ぬーにま祢く水て 明之

桐子もほものまぬ赤麗さ 杖力

身は白ふ平りにまぬありにり 弦唄

来てい存のちくは 茶山 七 葛水

碓とたわーてたけハ日くく川て 天年

五ろにまぬ海の小波 鉄 路半

大内のことものをさーと少きさ 圭子

ふろかりとま心伯のち 静 桑しぬ

交通諸名家

左景右の玄園海一福ぬのむ 京 塘兩

勢ひよき六部の征や五月晴 都雀

えり風のちるうにきーの心松 35 蒼帆

麻る人や麻をーむ人や交の月 沂凡

ふるくといふて通るや板のこま 宇雅

城山の城ちうつきておこまー 志彦

いつちう八人そとあふをこまに 家風

子や嫁子おやりとけれとの糸 妙直

急すもあさかとしあー深古 雪堂

時のをききーかてさくく 月堂

人より明日笑友子のくーり 也 浪水

糸さうよすきか日私た子 ち あたふ

嘆味をむえておきまや大はまて 冬於女

雨の行月やあんとゆかりりり 園豊

柳枯水くれ石のところ
そ枯や巖峨に「嵯峨の人をう」
雅石

新嘗會

清いところ持りて文り書ね
ねに入れの鳴るに「枯のむ」
自かて小便志けき新舟
人を見て「啼り」好の山
えねや皆親に似く人の
蝶 蜂 鳥 瓜 坊 湖 外

五月廿一よをれのみつく二月
伊賀 青李

出代で「啼」了や浪の水くるま
槐 主

ねろねにいく世替人をむりろ
杜 青

水争のかそ「る」うちに浮ておる
伊賀 茶 芥

おれと見るを「や」鳴すしなくまに
尾 比 依 寄

おの「や」を「か」てらの寺「きり」
士 朗

ちり「孫」るあ「くら」は「くら」ぶね
遠 井 知 白

学「兄」の舟「投」じ小「い」ま「る」肌
木 甫

そ 君してすこゝあゝるは水江、方壺

そ 亭を志とふてけけは後水江、木条三河

うくひすや垣を過ると建仁寺、桐茂

山姥やちのねをぬくまにり、虫草

大まハ、雪おし、糸の浮こ、ろ、煉糸

こやいふやと此よ木のそ、牛の折、草池

辛子ねと、いふとろし、五月、雨、江戸、蒸ア

日向のくは、可留うーのものにありて

やまをたぬくにたのそ、き、旅藤江、浦滴

梅うゑや、梅がちりて二三日、完来

まのうに、うちうさありて山、能る、威美

との産も、古き青が、林のく、川、春蟻

蟹や、人と一期と、やい、く、寸、近江、塘里

初空や、月のゆく、く、く、まか、る、如、凡

あふ、く、うら、せ、遠、見、せ、ま、を、ら、梅、去、何

元あ、く、ま、た、い、て、流、ふ、玉、あ、り、馬、瓢

まのこを屍目にけりてまゝはけ 菊二

さい—さのふらりと物集ぬまのり妻 千影

え日や若も淋—き嵯峨のたぐ 重厚

ひやくと一日 雨のさくら 可盈

水音ハ寐ても寐ぬし小田の 一 烏頂

七叶や何をつんてもたるの 冬松

こまのれハ夜も—月に麻の 彦 歩箭

戸のちりつら—る山ハあま 一 佐

角ふらハ夜もふ時々かくつむり 浮水

考の牙ハちるといふ日のをえくぬ 菊路

つむきや—をいさへ人と来に 柳庄

すふす代喜日訪へえそあり 奥州 素郷

魚つらりと牛の寐にうせの 中 平角

つ水くや巨燧やらの下り 知 若州 北雅

うつく—ま茎のふくれてまの 加州 車大

音つるよれハ雨より芦の 秋 加后 八熊

風の吹き声してやきとあ

丹后 昌平

をりもや人の日多つて猫の心

白見

大通ふ垣のくつ水や冬の月

木城

松竹をどねハ柳のふくえ

但了 翠風

手のふくら汗漬のおきて小枝ちり

东鼻

風ちりや枝ふりおに枝の枝

由達

川越や松に答ふる々歌の方

西厓

栞さくややつとまりて岸うかる

野子

汗くさきりや尻りやま

拾 泉潜

曉のや吹かて蓮の

花 彩石

初坂屋にうるさきまき年の匂い

杜由

水くみと糸にをさるるの山

菊男

澄すあまゆしえゆる月夜

蛸若

枝折戸と一日あけに冬の

兩 女子静

庭に残る 梅鉢鬼の轡やまの嵐

文市

曲水や月の盃よてうり

弄花

孤飛ふ跡さうりうり水屋 在 路州
 身洗ふ瀧のほとりやかん子身 坐寄 雨銘
 之影ハおに我カ一けやま 衣 聖陽
 梅を水ハ清くおほくぬ舌の 上 魯白
 あすひらくそくをへる山 樓 梅知兩
 之尺の本と歌をきき月ねり 亦 蝶醉
 梅をてさくらまつまの小雨 オチ 南明
 ねと、まほやくとまぐえさるおね オチ 祥示

昼の月おろもき海山さ九う 比后 文曉

秋の風灯にあふものと来にりり 比后 倚石

まーささもて来る沖の白帆 比后 秀丸

水呑て午ハ森にりり天の川 比后 由父

摺紙のねとをーさる布衣のき 比后 度旋

名月やまの河浪地にくくる 比后 玉屑

さむいーめに琵琶うのまのりあ 比后 布舟

白のたりて生代るうをり涙 比后 文至

おきくのとし〜ふえて我いのち、李山
ちりきりと杖立等の朝の切、古香
其時にぬすく知ぬかき〜
七字にうとを耳して菊りぬ、涼風
むしのきりやきると此にうとを三つ〜
稲書ハ念佛云てもおりりりり、
影のぬけおる淨の浮葉、
と日月の影にしたるに字の産、

大坂 瑞馬

夕顔や浮とておの 二日 月、井眉
雲月にありてとよの日ぬ、不二文
よきふとのきりにあきりるの秋、月居
大原ヤ赤と鳥にさくぬする、
十六夜の雲るる老ういそき、
草花にそへてやるし白あめ、
行かりにかき〜そのさるお、
花にちる名あきりるに葉の花、

望月 方朗

京 百地

江戸 照子

尾州 逸人

おとこまだ 人又空のてふふりり 大坂 芸量

むの罪のふれふれーそそまら 奇淵

麻のちろ葉おーよくお風くら 早語

花と月小燈も宵世の友あー 音雙

あーのて老ぬ袷にうつる 乳 万和

弁粧て足小ハ宵明 月々 任 貞道

寐て起て奴屋つる玄中月相 後 槐彦

あーの粧いにさるまゝの 紀州 文淑

古アヤあーいさおらに梅の花 休中 葉子

露の花々朝の心を戯まむーあり 三河 葉子

汐風や裾のらさのら一層のさ 何了 袖蓮

名のいさいとせの夢りこまの 大坂 てい女

月涼ー桐あー小舟さへ 南浦

年かぬ山馬ハ夕日のさるれ 文丸

そ方つむさうりあて 海の香 江風

人さるもすのうに 月の暮 心 葉友

吃を利し極まりり亭の 海 寺 思

急月の空より峰を渡る 下 士 川

異作もよの精の一ふりに 穆 彦

つくとも三あふまるとのあ けり

世をゆくりりまのまほに 凡 光 院

かふいにかふいぬの 山 光 院

てふたは... 光 院

浪の音のよきまのりかき 標 記 記 号

かきくまのりかきくまのりかき

かきくまのりかきくまのりかき

光 院

ちかきくまのりかきくまのりかき

桂しあのりかきくまのりかき

作佛牙聯供靈前

笑梅冬日愛香憂竹曉風喧起鳥鳴暗去天香閑
 鷗泛渚心碧流舟遠近聖蒼澗玉來奪十月紅鬱暮
 孤城烽火原旧都今拭目聖新塚特招魂朽木安
 郡蟻香禁林香列駕圍宮霞翠幕聖潤屋露青樽聖
 賢掌無味香主賓話不煩論交十里足聖窮望万井
 蹲兩歇雲峰競香楚荒石窟存魄迷敲骨鬼聖聲冷
 斷腸猿蜀道山香暗音浙江浪香翻掉岌坡老隘聖
 磨水馬卿禪文藻濃於酒香德華甘似餐香瓊兮歌路
 客聖鳥也法家孫玄帝香收農香亥香奎仙香称独尊非香藉
 心本動聖解印意何繫嘉香適寧留迹香清忠豈香永思聖

俳諧集冊

俳諧御摺物萬板木師

御銀札

大坂心齋橋筋南本町

御印判

松井忠藏

金銀銅石印

